晴れる空

田中　浩司

父は酒を飲みながら言う。

「俺は浩司がいるからビクビクしてるだぞ」

私が、隣の部屋にいるのに、大声を出し「おっかなくていきていられねえわ」と言う。私が何をしたわけでもないのに。

父は、アルコール中毒だと思う。台帳にポリープが6個もでていて、そのうち、3個は先月摘出したが、酒を相変わらず飲んでいる。ポリープも癌の疑いがあり、ガンセンターへ送った。

癌の疑いがあるのに酒を止められない。でも、酒を飲んだからといって、ポリープが出たとも癌になるとも私は思わないが、しかし、世間一般的に、酒を飲み続けていれば癌になるといわれている。

私は、一九歳のときに精神病になった。御飯のときにいつも父は酒をあびるほど飲んでいて、私は、精神安定剤をその横で飲んでいるのだが、私の心が分らないのかなあと思っていた。私は父が怖い。私の病気がよくなり、アルバイトだけど会社に勤められるようになってから、父は強烈に酔っぱらって私を睨むようになった。

今では、父があまりにも怖くて私は一人で御飯を食べている。母は、「おとうさんはどうして浩司を睨むでぇ」と聞くが、父は「睨んでいることは知らない」と言う。

私も家族から逃げるようにして一人で御飯を食べていることが悔しくて、父に言ってやった。「どうして、お父さんはボクが生まれてからボクと話をしないでぇ」

すると父が、「お前が幼稚園のときに一緒に電車を見に連れて行ってやったから、それでいいじゃん」と言った。

人間は、ひとりひとり価値観が違うが、しかし、こんなことは本当にあるのだろうかと思うが、父は死にたくて仕方がないのかも知れない。酒を飲み続けていることで自殺を図っているとしか思えない。父は言う。「死んじゃめえば何もわからねえわ」

父が死んでくれる。私は今、晴れようとしている。私が生まれてから五十四年間

続いた恐怖は漸く終わろうとしている。そんなとき、私に彼女ができた。相手はファミレスの社員。私のような新聞配達員でいいのかと思ったが、彼女はうなずいてくれた。とても恐縮に思う。空は晴れようとしている。

思えば、私が精神病になりはじめたとき、父は私、働け、働け、怠けるなと繰り返し言っていた。その頃は病院では、ノイローゼと診断を受けていて、医師からも働くように言われていたが。しかし、幻覚をみたり幻聴を聞いたりした。

ある日、会社へ行きたくはなく、睡眠剤を多量に飲み、自殺を図った。しかし、朝になると普通に起きて会社へ行った。病院からはもう睡眠剤は処方されないようになった。それでも父は、甘えるな、働け、と私に言う。私はとうとう精神病になってしまった。私は、働きたくはなかった。病気なので休みたかった。

なぜ、あのとき父は、働け、働け、と言ったのか、いまだに分らない。父は、いつも母としか喋らない。私は寂しい。たった三人の家族なのに、私は心理的な虐待を父から受けているような気がする。

たとえ父が癌であっても、そして痩せ細って体力がなくなっても、私は父に対し、老人クラブのグラウンドゴルフへ、行け、遊べ、遊びに行け、行け、などとは言わない。かつて自分がされて嫌だったことを相手にもさせない。ただ、悪い者は自然に悪く終わってしまう。私は知らない。父の勝手だ。好きなようになってしまえ。

ただ悪いことばかりではない。私が小学生のときに、グローブを買ってくれて、一緒にキャッチボールをしてくれた。

また、私が精神病で働けなくなると、頑張って会社へ出勤して、家族のために働いてきてくれた。家には病気の私と、やはり喘息で入退院を繰り返している母が居いて、家族の中は大変暗い状態であった。父は会社へ行く前にかならず何度も吐いてから出勤した。ストレスがあったのだと思う。

そして私が再び会社に勤めた頃、まだ会社になれていないので、めまいがして倒れてしまった。父は、フラフラする私をクルマに乗せて救急車よりも早いスピードで病院に連れて行ってくれた。私は、そのとき生まれてはじめて、父に「ありがとう」と言った。

父は、やはり愛情がある人。ただ愛情の出しかたが非常に下手。そんな照れを隠すために、いつも怒鳴って怖い態度をとっているのかも知れない。

父から新設にしてもらったことは他にもたくさんあるはずだ。私が記憶の奥にそ

れらをしまいこんでしまって分らないだけのことだ。父の悪い所だけ目に付いてしまう。良いことも悪いこともあるのに、そんな私も悪い。